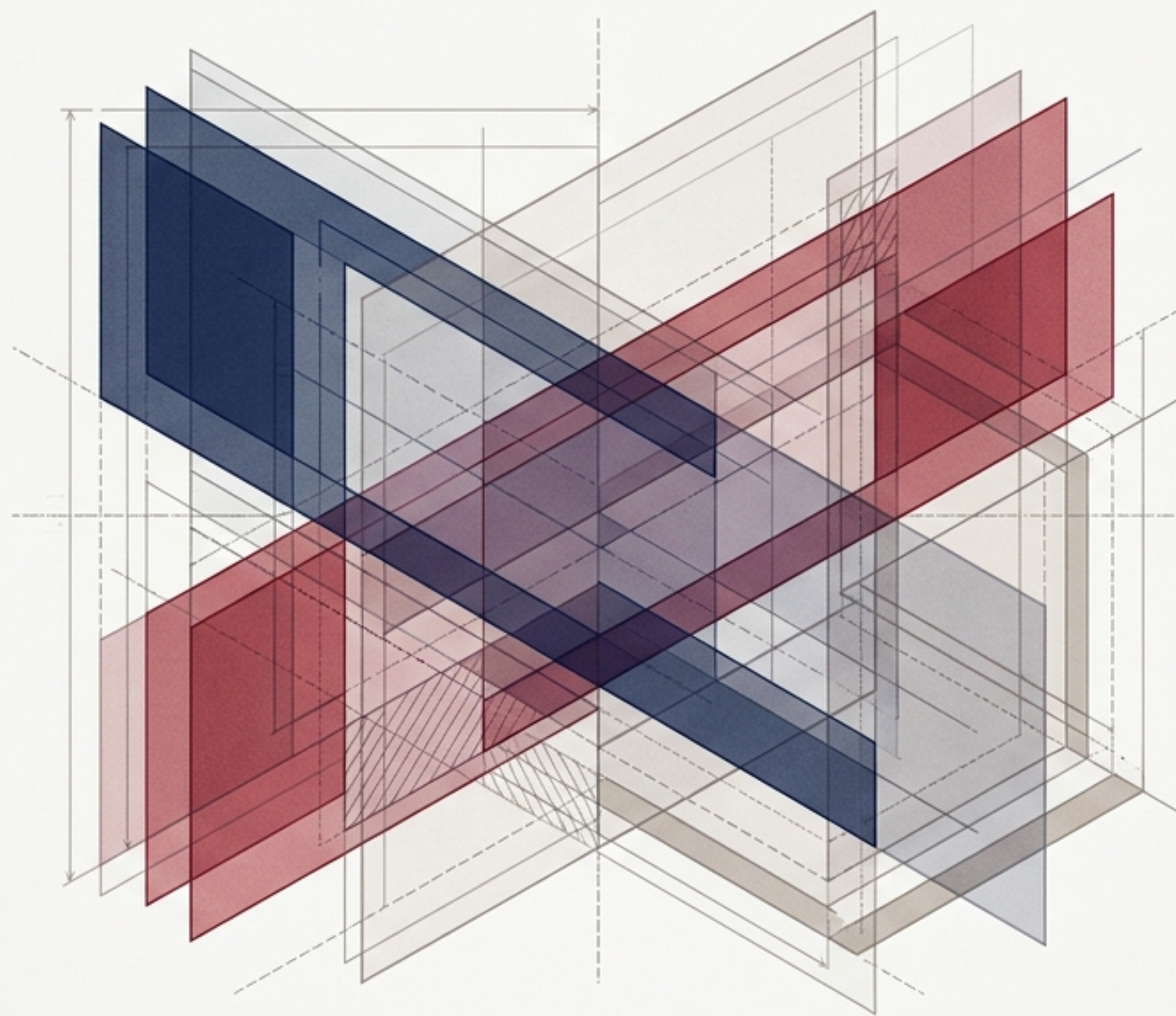




米国「60億ドル科学イニシアチブ」の深層と日米比較戦略

AI for Scienceを巡る国家間の競争と協調のリアル

Executive Summary：3つの戦略的視点



60億ドルの実態

米国の「60億ドル超」の大半は新規国費ではなく、民間企業11社からのクレジット提供枠（24億ドル）や既存投資のパッケージである。同時に、米国連邦科学予算は歴史的な削減要求に直面している。



日本の立ち位置の再評価

文科省の「AI for Science」概算要求（3,789億円＝約24億ドル）は、米国の新規民間投資と同規模である。日本は計画と予算の強固な一貫性を持つ。



実務上の焦点とアクション

日米は「Genesis Mission」で10億ドルの共同パートナーとなった。今後は、米国計算資源へのアクセス条件の精査と、データ・知財（IP）契約の主導権確保が最重要課題となる。

見出しの裏側：60億ドルは「単一の新規国家予算」ではない

60億ドル超の 科学の黄金時代 (Science: A New Golden Age)

単一の新規予算で
はない・複数施策の束



事実1: 2026年10月8日の発表は、連邦政府・産業界・学术界・慈善団体の「投資の合計」である。

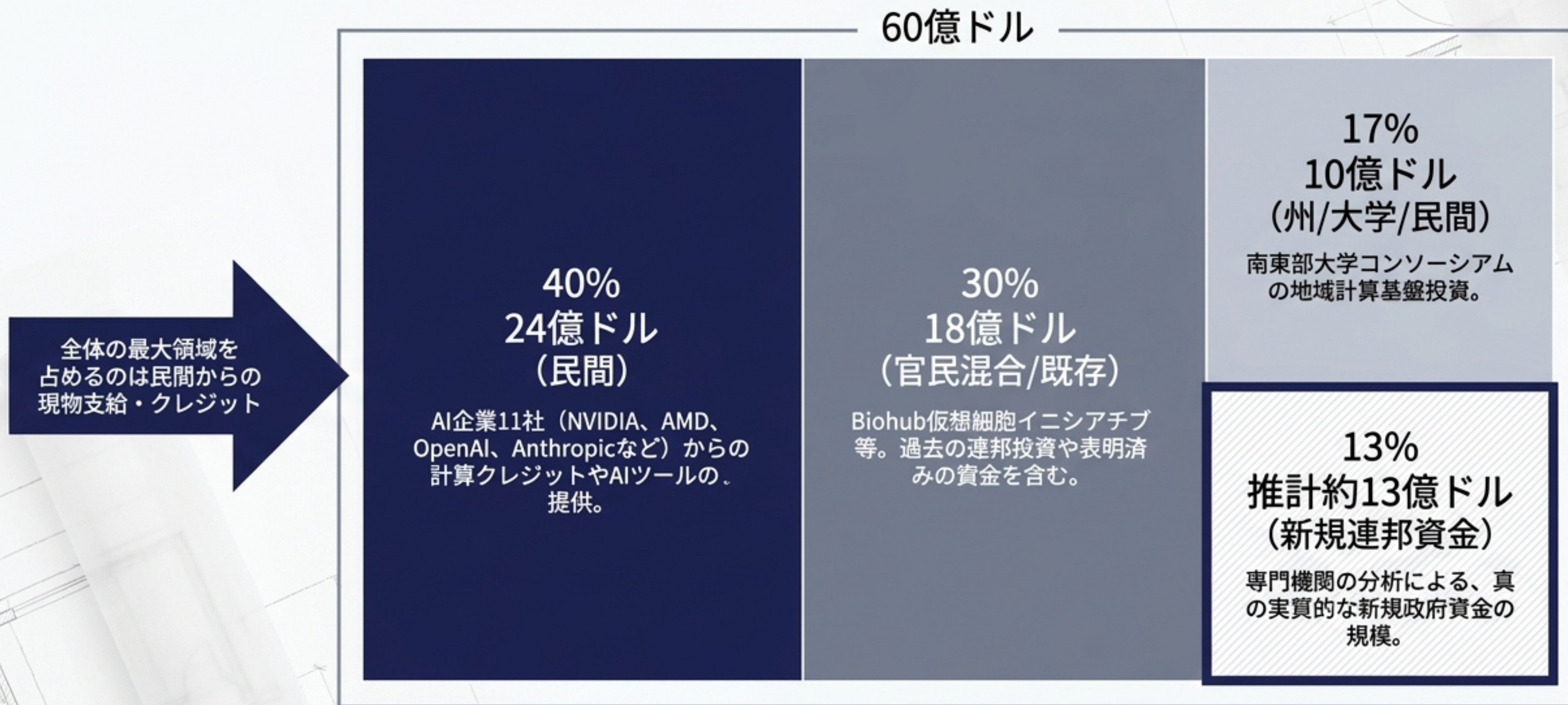


事実2: 資金の会計上の内訳や、各機関への明確な配分は公式には示されていない。



事実3: 項目によっては既存投資の再計上や重複が含まれており、「新たに歳出された連邦資金の合計」ではない。

資金の解剖：最大の拠出元は「AI企業11社」による計算資源



「科学の黄金時代」のパラドックス： 連邦研究予算の大幅削減要求

The Vision (黄金時代)

大統領令やホワイトハウス主導のトップダウン型イニシアチブ
(AIの科学利用、自律実験、量子計算機など)

The Reality (予算削減の現実)

-22%

連邦政府の全研究開発費
に対する削減要求

-54.7%

NSF (国立科学財団) 予算の削減要求
(87.5億ドルから約39.6億ドルへ激減)

FY2027 Budget Request

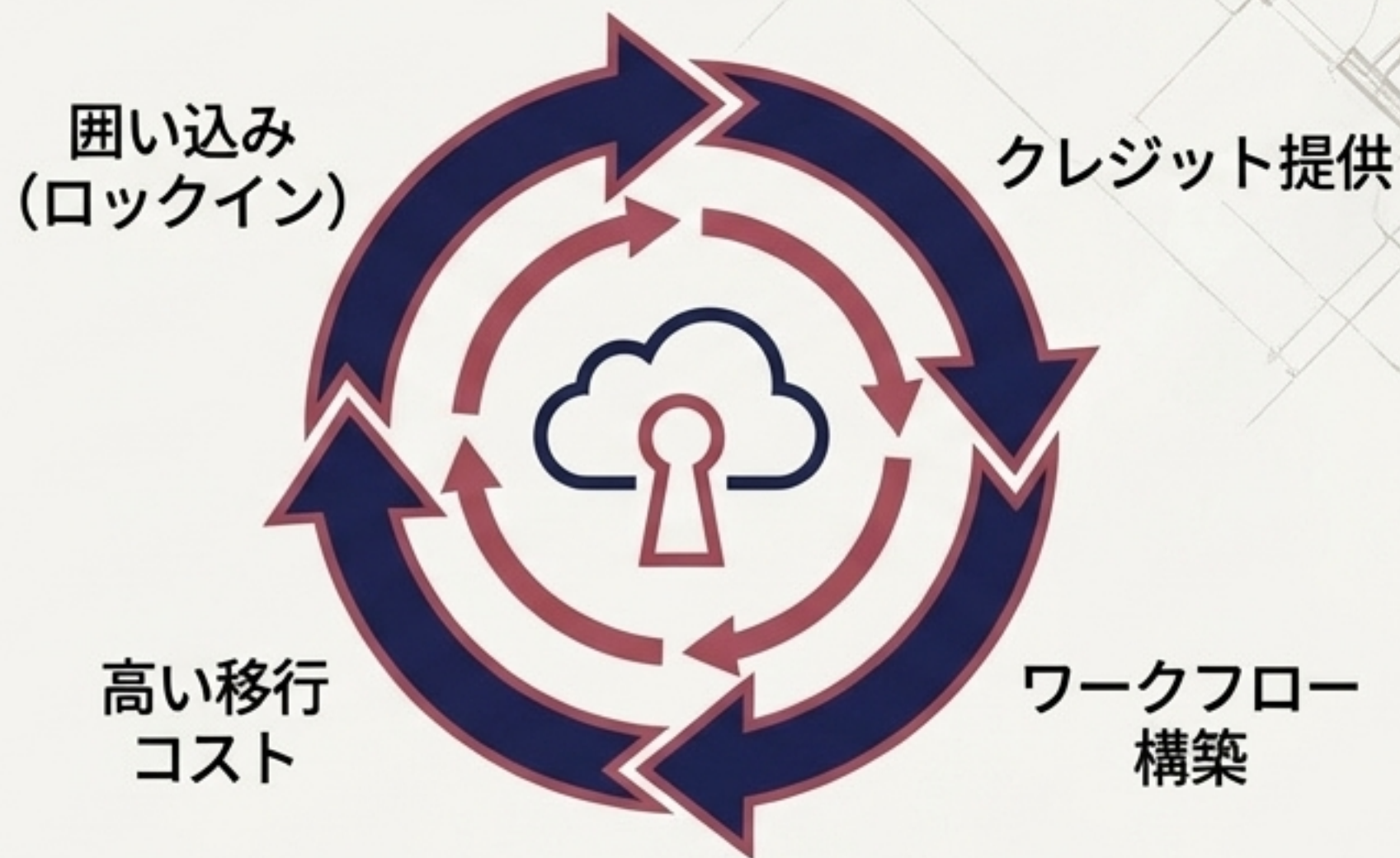
インサイト：華々しいサミットの裏で、議会予算との乖離と研究者流出の懸念が拡大している。

民間拠出のカラクリ：計算クレジットと「ベンダー依存」のリスク

AWS (5,000万ドル)：自社クラウドでのみ利用可能なクレジット。適格な採択プロジェクトに限定。

Anthropic (1.5億ドル)：連邦科学機関での「Claude」利用やAPIクレジットに限定。

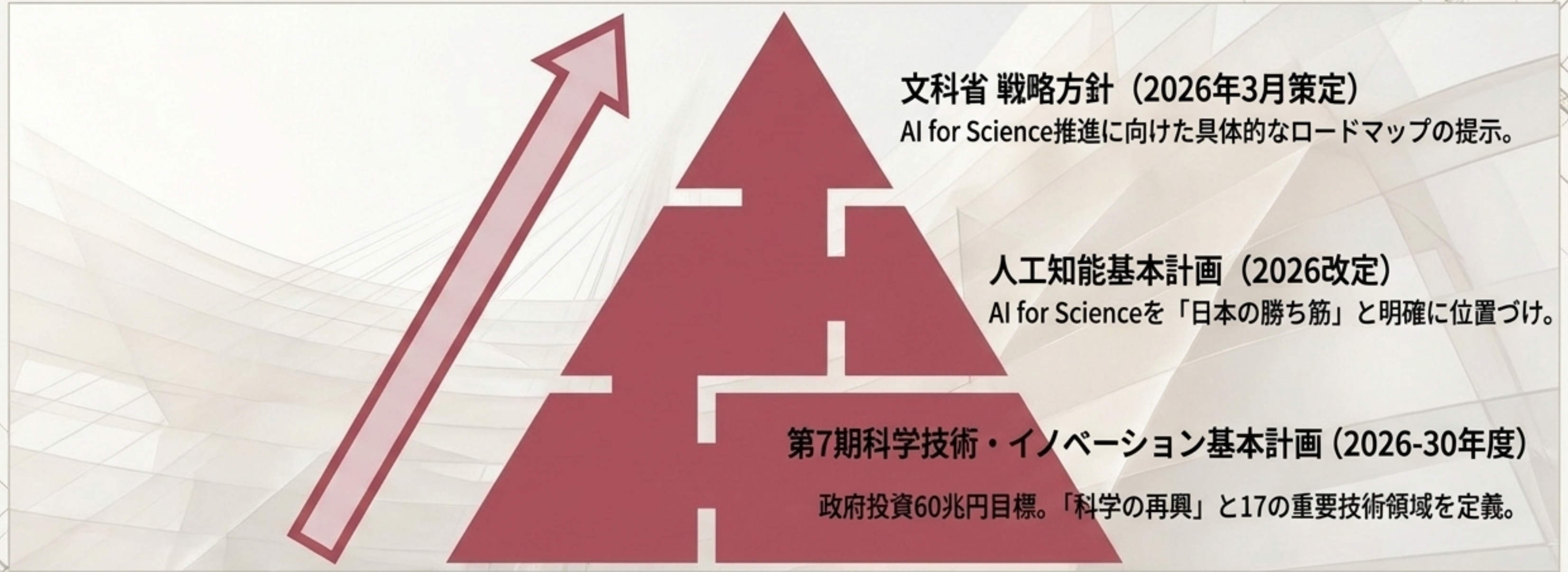
OpenAI：同社モデルに限定されたトークン割引。



Strategic Insight

3年間のクレジット期間中に構築したワークフローは移行コスト（スイッチングコスト）が高く、結果的に特定企業のプラットフォームへの強固なロックインを果たす役割を持つ。

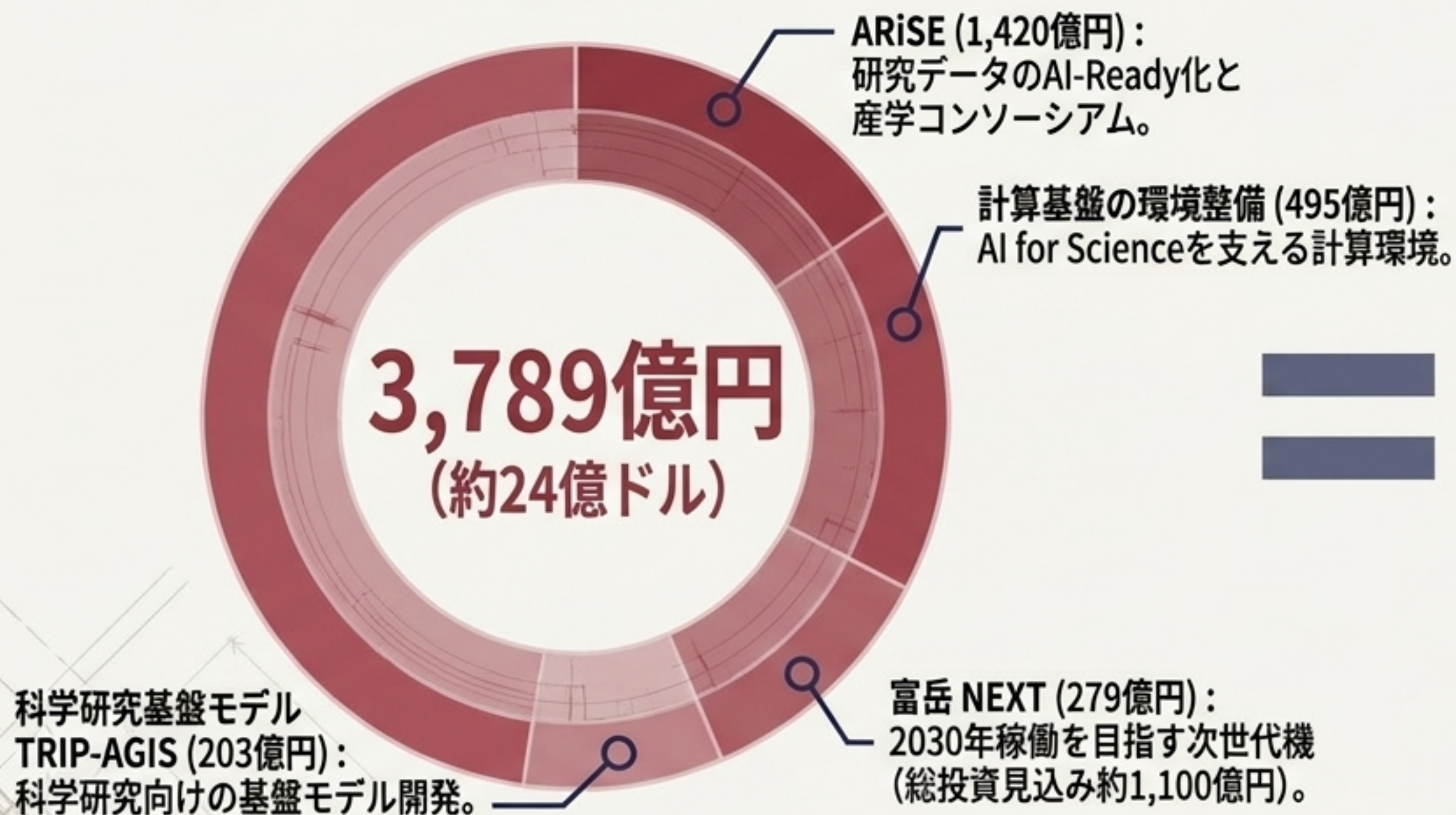
日本の対抗策：国家戦略から予算編成に至る 「強固な一貫性」



Insight

意思決定のスピードでは米国に譲るものの、日本の最大の強みは「国家計画と予算の完全な連動性」にある。

令和9年度概算要求：米国の民間投資に匹敵する 「公的資金」の投入



米国のAI企業11社の拠出額
24億ドル

Insight

米国の24億ドルが「民間からの条件付きツール提供」であるのに対し、日本の3,789億円は国費主導の「基盤構築」に向けた直接投資である。

日米が交差する接点：「Genesis Mission」 パートナーシップ

米国 (DOE)

💰 5億ドルの投資

日本 (文科省・経産省)

5億ドルの投資

Genesis Mission

- ① 計10億ドルの共同投資
- ② 11の共同研究チーム
- ③ 研究者の相互承認協定

最初の国際パートナーとして
戦略的意向表明に署名

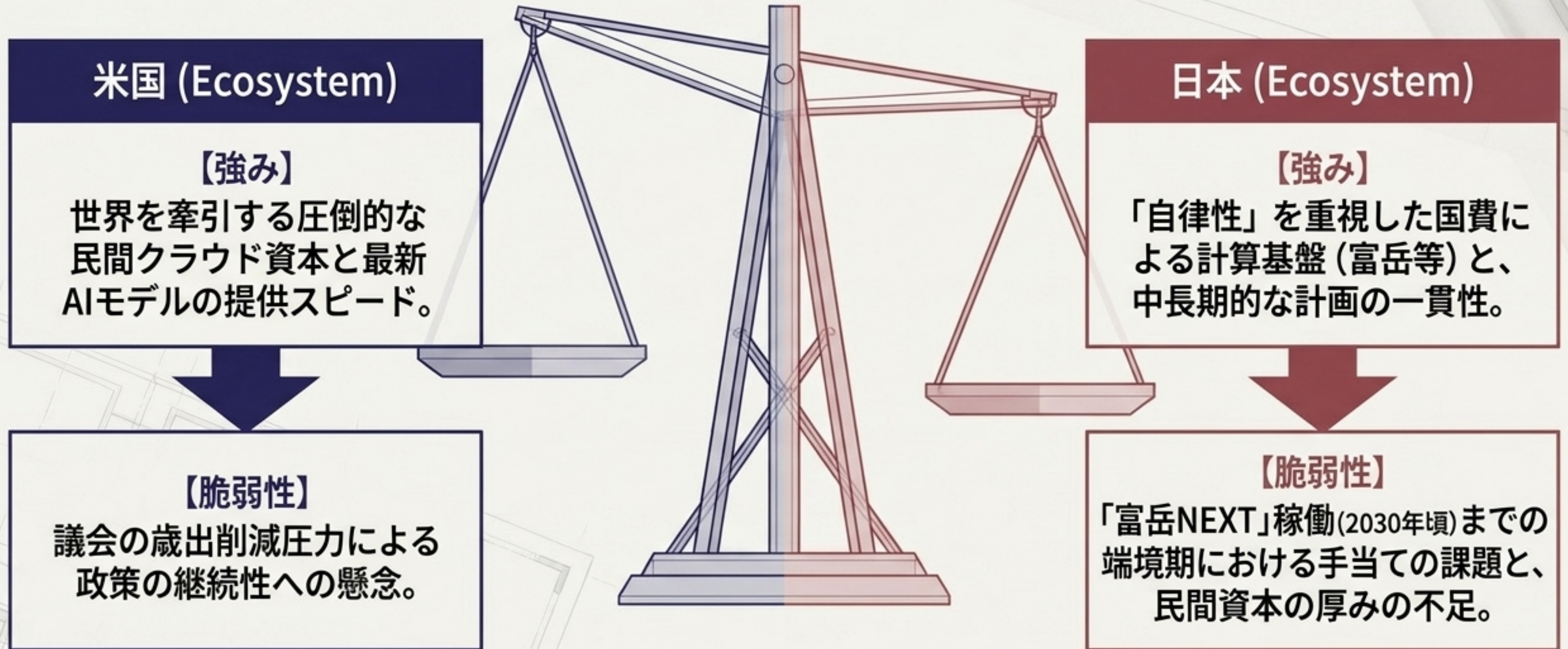


プロトコルの未確定：AI学習における重要データの扱いや知財 (IP) 共有ルールは現在「協議中」であり、ここが実務上の最大の焦点となる。

日米比較マトリクス：AI for Scienceエコシステムの構造的差異

	米国 (US)	日本 (Japan)	評価 / インサイト
予算の推進エンジン	民間資本主導 (巨大な企業拠出)	国費基盤主導 (富岳NEXT、TRIP-AGIS)	公的な新規基盤投資の 確実性は日本が優位
意思決定スピード	大統領令から 数ヶ月単位の超高速	閣議決定から 予算成立まで年単位	米国の機動力 vs 日本の計画性
人材育成モデル	加速型PhDなど トップ層選抜型	科研費・SPReADなど 裾野拡大・支援型	選抜による一点突破 vs 全体底上げ
国家予算の確実性	議会予算との 乖離リスク大	戦略・基本計画との 高い整合性	看板額は米国が圧倒するが、 実行確実性には差がある

強みと脆弱性：両国が抱えるエコシステムの「アキレス腱」



日本の企業・研究機関への実務的示唆（Implications）

1

計算資源獲得の「真のコスト」の精査

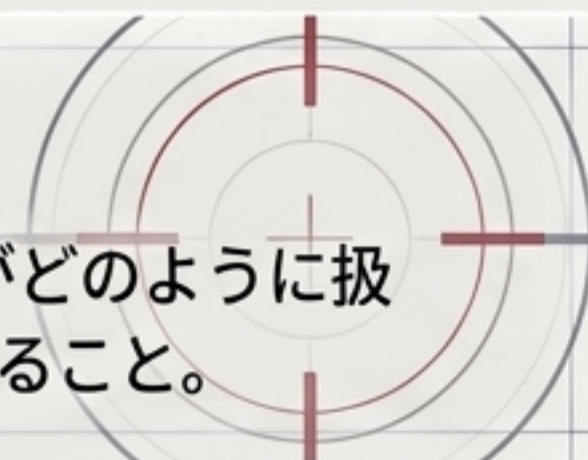
米国の提供するクレジットは魅力だが、自社モデルへのロックインや移行コストのリスクを伴う。利用条件と期間の厳格なデューデリジェンスが必須。



2

データと知財（IP）の防衛線の構築

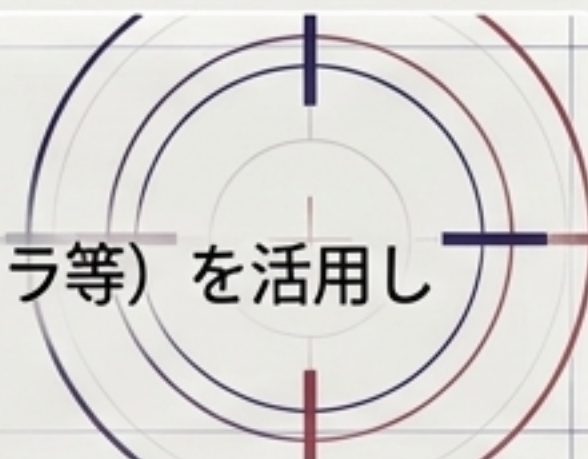
Genesis Mission等の日米共同プロジェクトに参加する際、自社の重要データがどのように扱われ、AIモデルの学習にどう利用されるか、契約プロトコルを主導的に確認すること。



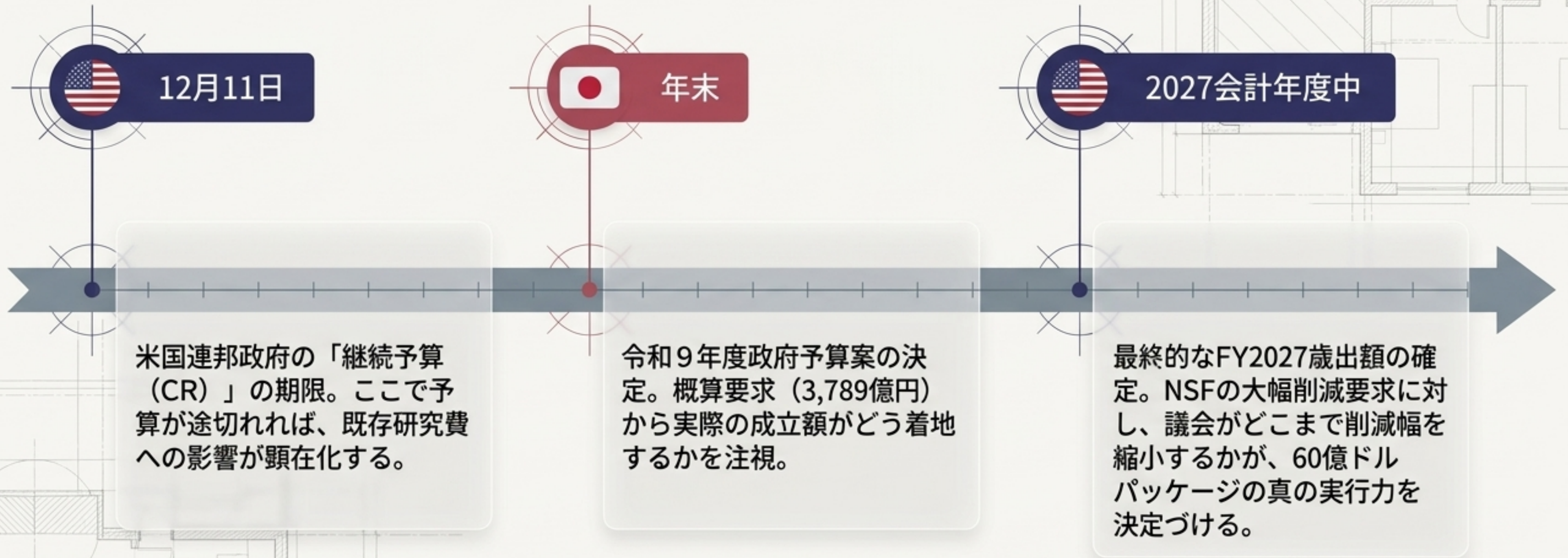
3

自律的AIエコシステムとのハイブリッド連携

米国ベンダーへの過度な依存を避け、日本の公的計算基盤（ARiSE、富岳インフラ等）を活用した自律的な研究開発ルートを同時に確保する。



Watchlist：今後の予算動向と監視ポイント



Conclusion: 米国の「派手な見出し」に惑わされることなく、予算執行の「現実」と日本の「戦略的一貫性」を見極めた上で、次の一手を打つべきである。